

派遣者番号	30K24	氏名	田原 桜子
研究主題 —副主題—	「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく「古典探究」の単元モデルの開発 —公立中高一貫校4年生・漢文「死諸葛走生仲達」の脚本作りを通して—		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	小川 正人
所属校	東京都立三田高等学校	校長	笹 のぶえ

キーワード：古典探究、主体的・対話的で深い学び、漢文の脚本作り、探究学習の手引き

1 問題の所在と目的

わが国の高等学校における古典教育の課題として、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、講義調の伝達型授業に偏っていることや生徒の学習意欲が低いことが指摘されてきた。これらの課題解決のために「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善に取り組むことが求められ、次期学習指導要領では国語科の科目構成の見直しが行われた。それに伴い新設された「古典探究」は、古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究を深める科目である。しかし、探究学習の単元モデルは、総合的な学習の時間と理科では示されているが、平成31年度からの「古典探究」の先行実施を目前にして、総合でも理科でもない、古典という教科の特性を生かした探究学習の単元モデルはない。

また、次期学習指導要領から全ての教科の改善の視点として、思考力等の育成のため言語活動が導入されており、「何を教えるか」というコンテンツベースの指導だけではなく、これまで以上に「どのような力が付くのか」までを見据えたコンピテンシーベースの指導をすることが求められている。「古典探究」においても、獲得した知識を活用しながら他者に向けて伝え、自分の考えを広げたり深めたりすることを通して、資質・能力を向上させることの大切さが明示されているが、「古典探究」における言語活動は先例がない。さらに、探究学習を支えるための支援教材（探究学習の手引き）を作成する必要がある。

そこで、高等学校の古典の1単元において、次期学習指導要領に明記された言語活動を取り入れた「古典探究」の授業を通して単元モデルの開発とその検証を行うことにした。

2 研究の方法

「古典探究」の資質・能力を分析した上で、総合的な学習の時間における探究学習の単元モデルを比較分析することによって、オリジナルの単元モデルを考える。それをを用いて単元に「主体的・対話的で深い学び」の視点を反映させ、漢文の脚本作りを言語活動として取り入れた授業をデザインする。さらに、これまでの座学中心の授業形態に慣れてきた生徒の実態に配慮して、探究学習の主体的な学びを支えるために「探究学習の手引き」を作成し、それをを用いながら研究授業を行う。授業の効果検証としては、生徒による授業評価アンケートと、脚本をループリックで評価した結果を用いて考察する。

「死諸葛走生仲達」(出典：『十八史略』)は、三国時代に蜀の優れた軍師および宰相である諸葛亮孔明が、魏の名将である司馬懿仲達と対峙をした逸話を描いた史伝であり、孔明が死んでもなお司馬懿に計略を図り、蜀を守った非凡な先見性を描く。

3 研究の結果

新教科「古典探究」で身につける資質・能力とは何かを、次期学習指導要領から読み取り、分析した結果、「様々な資料を読み比べる力」、「内容の解釈を深める力」、「本文に書いていないことを補完する力」、「自分の考えを深める力」という資質・能力として抽出し、整理することができる考えた。

「古典探究」の単元モデルを考案するにあたり、先行研究で提示されている総合的な学習の時間における探究学習の単元モデルを比較分析した。「田中モデル [田中博之, 2017]」と「桑田モデル」 [桑田てるみ, 2016]という2つの単元モデルの流れを重ねてみると、「課題設定→計画立案→情報収集・実施・表現→評価→振り返り」

という一連のプロセスを踏むものだと分かった。しかし、総合的な学習の時間を想定した単元モデルなので、10 時間程度の長い時間が必要となる。

そこで、古典という教科としての特性や 1 単元 6 時間という時間設定かつ単元内容を踏まえ、1 基礎学習(①学習課題の提示②知識の習得)→2 探究の計画(③計画立案)→3 実施 (④調査研究⑤作品制作⑥実践交流)→4 評価 (⑦自己評価⑧相互評価⑨探究学習の評価)→5 新たな学びへの展望(⑩学習の振り返り) という 5 ステップ 10 アクションのオリジナル単元モデルを作成した。

次に、このオリジナル単元モデルに「主体的・対話的で深い学び」の視点を反映させた学習活動を取り入れた。主体的な学びへと導くために、単元モデルの提示、探究学習の手引き・ループリック評価・振り返りカードの活用といった学習活動に落とし込んだ。対話的な学びへと導くために、協働学習、生徒と教員の個々のやりとり、本文・関連資料の読み取りといった学習活動に落とし込んだ。

深い学びへ導く手だてとして、深い学びの技法[田中博之, 2017]を活用し、史伝の解釈について本文や資料の読み取りに基づいて根拠を挙げさせること、史伝を孔明や司馬懿という様々な視点からの思考を促すこと、個人・グループ・クラスといった異なる多様な考えを比較して考察させること、個人で作成した脚本を持ち寄り、グループ活動を通して脚本の解釈を一つにまとめ上げるとともに、発表後は自分の解釈の振り返りをさせること、ループリックや振り返りコメントカードによって可視化された学習課題に対して生徒自身に意識させてメタ認知を促進させること、といった学習活動を取り入れた。

言語活動は、「読むこと」の領域を深め、「古典探究」の資質・能力を身に付ける効果があるものと考え、脚本作りにした。推測や個人が現在もつ表現力に頼ったり、表面的な訳や内容理解で終わったりするのではなく、資料によって補完された脚本を制作させることがポイントである。出典の性格を生かし、その簡潔さを補う関連資料の読み取りを行った上で、知識を活用しながら制作ができるようにワークシートを工夫し、脚本作りの計画に沿って制作させた。

4 研究の考察

生徒の授業評価アンケートをカテゴリー化して分析し、脚本をループリックで評価した結果を用いて考察した結果、単元モデルにより、古典探究の資質・能力を身に付けることにつながったことが分かった。また、その単元モデルにおいて、「主体的・対話的で深い学び」の視点から言語活動を充実させたことにより、深い学びへと導く効果が見られた。さらに、探究学習の手引きを活用したことにより、これらの生徒の探究学習の支援に役立った。

よって、本研究の成果は、次期学習指導要領に明記された言語活動を取り入れた、「古典探究」の授業を通して、古典探究の資質・能力の育成につながり、生徒を深い学びへと導く効果が見られたことで、ある程度の単元モデルの有効性を確認できたことが挙げられる。

実習を通して、古典における探究学習を進める中で、時間管理に課題を感じた。

探究学習は、深い生徒理解に基づいた時間管理が不可欠である。勤務校における通常の勤務と比べて、実習生という特殊な立場において、生徒の実態に即して、きめ細かく柔軟に、限られた時間を操ることに苦勞した。生徒を様々な視点から、継続して見守ってきた実習校の指導教員から、生徒の実態を伺ったことが、生徒理解を深める一助となった。よって、様々な視点から生徒理解ができる通常の勤務であれば、この課題も解決できると考える。

5 今後の展望

今回の実習では 1 単位・1 年生の必修教科目のなかで実施させていただいたが、本来の「古典探究」は 4 単位・3 年生の選択科目なので、総合的な学習の時間の単元モデルにより近付けて学習課題の設定や情報収集を生徒自身にさせたい。

また、単元モデルに基づいた探究学習は、科全体として共通認識をもち、事前に年間指導計画に入れ、学期に 1 度程度の実施を予定し、「探究学習の手引き」を活用することで、共通での実施が可能になると考えている。教員相互の連携が不可欠なので、協力して実施したい。